

エッセイ

青年は映画館をめざす

きらいまさき
帰来雅基

(FM香川「勝手にシネマニア」パーソナリティ、1977年大学商学部卒業)

去年の秋、二十数年ぶりに京都で開かれたゼミの同窓会に出席した。夜の宴会には恩師玉村和彦先生をお招きしてドンチャン騒ぎをしようと計画していた僕たち四十代後半のオジさんオバさんたちが、まず最初に集合したのはやっぱり今出川キャンパスだった。というか、学生生活のすべての思い出は、ここ今出川にしか存在しないのだから仕方ないのである。

改めて大学周辺を見回してみると、卒業以来二十五年という時の流れはいかんともし難く、毎週「平凡パンチ」を買った元文堂書店は移転してしまつたと聞いたし、いつも親子丼ばかり食べていた山下食堂は何とタイ料理店に変身していた！それでも「わびすけ」に学生たちが出入りしている姿を見ると、自由気ままな風に吹かれていたあの頃の自分を思い出して、あつという間に鼻の奥の方がツン、と痛くなった。

それから一時間後、僕らは今出川から約三十キロ離れた京田辺キャンパスの正門に立つてその広大な敷地を杲然と見ていた。学生生活に必要な物はすべて揃っているらしいキャンパスは、まさしく＃ひとつの街＃であり、そのスケールと環境が今出川キャンパスと比べるべくもないことは一目瞭然だった。しかし、そんな立派な校地を見学しながらも、僕はやっぱりこう思っていたのである。「河原町や新京極の映画館に通うには、ちよーつと遠すぎるんとちゃうか…」

*

*

誰の少年時代にも、人生の分岐点となるような決定的瞬間というものが必ず存在する。僕の場合、それが中学三年生の初めに映画「ベン・ハー」を見た時だった。

映画好きの両親の影響で小さい時からかなり映画館に通ってはいたけれど、それまでに見たどの映画にもない壮大なスケールと熱い人間ドラマに打ちのめされてしまった僕は、さつそく翌日、新しいノートを買ってきて表紙に「映画は我が人生」と書き、第一ページに「ベン・ハー」の感想を書いた。この時から主体性を持ってスクリーンに向き合い、映像の持つ魅力にとりつかれ、総合芸術としての映画の素晴らしさにのめりこんで行く「映画ファンとしての人生」が始まったのだ。

高校に入学した一九七〇（昭和四十五）年は、激動の七〇年代の始まりであると同時に、映画を求める旅の入り口でもあり、さらには僕の青春時代の幕開けでもあった。だから僕の高校時代のすべての思い出は映画と重なっていると断言してもいい。

一年間に百回近く映画館に通い、見た映画への思いを片っ端からノートに書き、「映画を見る時間がないから」とプラスチックボードをさつさと退部したりもした。好きになった女の子をデートに誘う時も、まず手始めは映画だった。来ないとわかっているのに、ひよつとして……という淡い期待を抱いて渡した「ある愛の詩」の前売券を突き返された時のショックは今も忘れられないし、「小さな恋のメロディ」のトレーシー・ハイドに出すファンレターを書いたのは、十月の肌寒い物理教室での授業中だったのも鮮明に覚えている。

大学受験の一年前、僕は「志望大学を見学して、受験への志気向上を図るんや！」との意気込みで、郷里の香川から京阪神方面へ二泊三日の旅に出かけた。すでに同志社を志望していた僕は、今出川校地を見学すると後はどうでもよくなってしまう、大阪梅田のニューOS劇場へ「フレンチ・コネクション」を見

に行った。最新設備と大画面の迫力に大満足した僕は、「よし！ 来年からはこういう劇場で映画を見るぞ！」と固く心に決めていた。要するに、映画好きの僕にとっては、志望大学を見学して奮起するよりも、都会の素晴らしい劇場で映画を見て「やる気」を起す方がずっと手っ取り早かったのである。

一九七三（昭和四十八）年、アメリカがパリでベトナム和平協定に調印した数カ月後、僕は同志社大学の学生となった。時はまさに政治の時代だった。ヘルメットの学生がスピーカーで「我々はあく大学当局のお」と大声でアジる姿を見かけるのは学内では日常茶飯事だった。そんな中、右も左もない極楽トンボの十八才だった僕は、まさに全身で映画に浸っていた。

麻雀、酒、バイトと、一応人並みに経験を積んではいたが、生活の中心はやはり映画だった。今出川、下宿していた堀川一条。それと河原町、新京極の映画街、さらには祇園会館や一乗寺の京一会館。これが僕の行動範囲の全てだった。

大学会館では、毎日どこかのサークルが上映会を催していて、カンパと称する九十九円を払って、どれだけの時間をあのホールで過ごしたとか！ そして毎週土曜日の夜は、京一会館のオールナイト大会で菅原文太や日活ロマンポルノに熱狂する多くの学生たちの中に僕もいた。その不思議な連帯感と高揚感。今思えば、あれは七〇年代という時代そのものが持つ独特の熱気だったのかもしれない。

それでも映画関連のサークルに入ろうなどとは一度も考えなかった。サークルに入って活動する時間があるくらいなら、一人で好きな時に好きなだけ集中して映画を見たかったのだ。そんな僕だが、入学直後の五月頃、「SF研究会」なるサークル

に入会しようとしたことがある。様子を見に出かけた時は、ちよど部員たちがSF映画の傑作「二〇〇一年宇宙の旅」について大議論をしている真つ最中だった。何人もが輪になって思想性がどうか哲学がどうしたとか、ほとんどケンカ腰で今にも殴りかからんばかりの様相である。しばらく見物していた僕は、「映画の価値観を人に押しつけようとするヤツはダメや」と思った。映画の魅力を穏やかに語り合うのはいいが、見た人それぞれによつて大きく違う価値観を自分のそれと違うからといってそんなにケンカしてどうするんやと情けなくなつた僕は、何だかバカバカしくなつてしまひ結局入会するのをやめた。「論争するヒマがありや映画に行くわい」と思ひつつ。

そんな一年次生の晩秋、一般演習クラスのメンバーで飲み会があつた。全員にかなり酔いが回つた頃、普段からノリのいいヤツが急に宴会芸を始めた。彼はアツという間に上半身裸になると、黒いタイツに黒い靴下をはき、長いヒモのついた二本の棒を振り回して「アチョーッ！」と奇声を張り上げた。僕らは呆気にとられて口々に「力道山か？」とつぶやいた。すると彼は涼しい顔で「これがブルース・リーのドラゴン拳法や」と言つて、またポーズを決めて見せた。これが、僕がブルース・リーの名前を知つた最初の夜だった。それから数週間がたち、公開された「燃えよドラゴン」を見た僕らが熱狂的なドラゴンフリークになつたことは言うまでもない。当時の少年たちや若い世代で、この時期にヌンチャクの練習をしなかつたヤツは絶対いないはずだ。かく言う僕もその一人ではあるが……。

学費値上げに端を発する紛争で、前代未聞の四カ月にもわたる全学休講で明けた一九七五（昭和五十）年、映画評論家になろ

うとせつせと「キネマ旬報」に投稿し、シナリオのようなものを書きちらしながら年間数百本の映画を見続けた僕は、胸まで伸ばした長髪にパーマをかけ、裾の破れたベルボトムジーンズにサンダルをつっかけて、今出川と下宿と映画館のトライアングルを浮遊しながら、どうにか三年次生になつた。

「映画鑑賞の限界に挑戦する！」と宣言して、朝十時からオールナイト大会をはさんで翌日の夜十時まで三十六時間、計十四本の映画をぶつ続けて見たのもこの頃である。「そんなアホなこと、お前にしかできん」と友人にはあきられたけど。

そしてそれまで、映画が僕の人生に実利をもたらしてくれたことなどなかったのに、この年の秋、実にラッキーな事件があつた。同じ下宿の後輩が、彼が単位を落としそうな政治学の授業のレポートを映画好きの僕に代筆してほしいと頼んできたのである。そのテーマがなんと「山本薩夫の『金環蝕』」を見てその感想を現在の政治状況とあわせて書け」というもの。すでにその映画を見ていた僕は、間髪を入れず「よっしゃ！」と二つ返事で引き受けた。そして後輩の弱みにつけ込み、書くだけで千五百円、「優」を取れば五百円上積みという約束をとりつけ、その日のうちに一気に書き上げた。後輩は「帰来さんは神様です！」なんてどこかで聞いたセリフを言っていたものだ。一週間後、レポートは見事に「優」を獲得し、僕は二千元を握りしめてガッツポーズをした。つまり、その後輩は僕に映画の仕事を依頼した最初のクライアントとなつた訳である。

そしてついに四年次生！それまで教室より映画館で過ごした時間の方がはるかに長かつた僕は、卒論のテーマにも「映画」を選んだ。「日本映画産業の歩み―その歴史的考察と展望―」。

商学部生にしては実に異色のこのテーマへの取り組みを認めてくださった玉村先生には、今も感謝の言葉もありません！先生のおかげで、映画が好きで好きでたまらないという証のひとつとして、卒論も映画だったと今も胸を張って言える。そしてこれが大きな自信となつて、今の僕を支えてくれているということも間違いがないのである。

こうして僕は同志社大学での四年間を終えた。女つ気もないまま、ひたすら映画に首までつかっていた日々。要するにキザつたらしく言えば、当時の僕はやはり「映画が恋人」だったのである。

そして今、故郷でのサラリーマン生活も二十五年目を迎えた。何とか映画で食べていきたいという思いがかなうはずもなく、僕はごく普通の会社員となつた。ゴルフや釣り、パチンコにはまったく興味が無いし、囲碁や将棋、コーヒーやタバコにもほとんど縁がない。「趣味Ⅱ映画」これだけしかないのである。

普通の結婚をして二人の子供の父親となつた今も、うまく行かない仕事の合間や、ストレスのたまる日々の生活からちょっとだけ離れて心身をリフレッシュするために、週に一回は映画館のシートに座る僕がいる。プロの映画人にはなれなかったけれど僕はこれで十分に満足している。そして昨年、長年書きためたエッセイを『高松純情シネマ』（青新社刊）という一冊の本にして多くの人に読んでもらえたということは、僕の人生の上での大きな財産ともなった。とにかく人生の折り返しを過ぎた今も、映画に対する熱い思いはいささかも変わらない。ただ映画を見続けて、気がつくといつのまにか三十年以上という月日が過ぎていたというだけなのだから。

*

*

そんな思い出にひたりながら京田辺キャンパスを見学した僕らゼミの同級生はその夜は近くに宿を取り、玉村先生を交えて、みんな学生時代に戻ったように飲んで騒いで羽目をはずした。五十才近いオジさんオバさんのパワーに先生もきつと驚かれたというかアキレてモノも言えなかったのでは……と思うけど。

翌朝、二日酔いで痛む頭を押さえながら部屋のカートンをあけると、窓の向こうに大学の広大な敷地が見えた。しかし、同志社とそこに学ぶ学生たちの歴史が京田辺から紡ぎ出されていく時代になつても、僕の思い出は今も今出川キャンパスとともにある。

同志社大学商学部七三年度生・四〇三番だった僕の青春は映画とともにあり、映画は常に僕の思い出とともにあつた。人生のターニングポイントにはいつも映画がある。映画の思い出はその時々で自分が置かれていたステージの心象風景でもある。僕の人生は映画に彩られており、映画は僕の人生を補完する。そして、その思いは学生の頃も四十七才の今も全く変わっていない。

窓から入った晩秋の北風が僕の頬をそつと撫でていった。ひよつとしたら、その風はここから北に離れた烏丸今出川の交差点あたりから吹いてきた風なのかもしれない。

あの頃、青春時代を吹き抜けていた自由で甘酸っぱくてちょっとほろ苦い風の匂いが蘇ってくるような気が、その時ふつとした。

小説の一冊が出来るほどの豊富な経験を私にもたらしした。

企業留学先のオハイオ州デイトンは、NCR本社のある静かな都市だった。研修先のDELCO PRODUCTという会社は、今では当たり前の、値段表示ラベルを商品各個に貼付ける小型自動機械を開発し、ラベルと一緒に小売店やスーパーなどに売り込んでいた。日本ではようやくスーパーが登場し始めた頃である。NCRのコンピュータ室も見学した。部屋一杯を占めるマンモスコンピュータが作動していて、凄いと思った。ところがそのコンピュータほどの機能を、本稿を打っている小さなマックG4が所有しているという事実には、四十年の時間の経過を実感させられた。

研修期間中は週末も遊び回ることなく、とにかく無駄金を使わず帰国の費用を稼ぐことに専念した。首都ワシントンとニューヨークでは国際セミナーが開かれ、各国からの企業留学生たちと交流した。研修が終了すると、日本を出る前に買い求めたグレイハウンドバスの「九十九日間九十九ドル」という格安チケットで、全米各地をひとりで歴訪して回った。経費節約のため極力バスの中で寝るように予定を組み、宿泊先はYMC Aと決めていた。その間朝昼晩とお世話になったのが、まだ日本に上陸していなかったハンパーガーである。毎日飽きずに頬張りながら、これが日本で流行る日が何時かは来るだろうと確信していた。藤田 田氏が日本マクドナルドを設立したのが、それから数年後のことである。大きな商売のネタはそこら中に転がっていた時代だが、私はただひたすらアメリカの広大さを実感するだけの為に貧乏バス旅行を続けた。

巨大なアメリカを旅行していると、日本という国の、湿気

多い風土の優しさや自然の細やかさ、新しいものと古いものとが雑然と混在するいい加減さ、そのようなものに対する愛着が次第に芽生えてくるのが不思議だった。

摩天楼の名主は、まだエンパイア・ステート・ビルだった。その展望台からの眺めを私は見ることもなかった。とにかく無駄な金を使わず歩き回り、地下鉄から地上に吐き出される蒸気の中を動き回る雑多な人種を眺め、五番街に立ち並ぶ質屋の店頭を見るのが楽しくてならなかった。今から考えても私は相当変わった旅行者だったに違いない。が、そうした興味のそそれ方、今日の星野画廊を営む根本理念と通じるのではないかと、現在の私は妙な納得をしているのである。

行く先々で出会った人々は、私が日本からの留学生だと知ると、誇らし気に日系建築家Yamazakiの設計したモニュメント、教会、図書館などを私に紹介し案内してくれた。問題の世界貿易センタービルも、そのYamazakiが設計した代表作のひとつだった。

それにしても飛行機が激突したしばらく後で、実に一瞬のうちに崩壊する近代建築物に、しばし我が目を疑った。ニューヨークでは地震の被害を想定した建築物がないことに思いが至る。その後の報道で、世界貿易センタービルの崩壊は、周辺の地盤にマグニチュード六程度の地震を与えたと言っていた。テレビの解説者から特殊な建築方法の説明を聞き、やはり地震大の日本の近代建築であったなら、こうした崩壊にはならなかったのではないかと、地域での活断層上のマンション建築問題の運動をめぐり、地震と建築のことを聞きかじった私たち家族は語り合った。

十二月初旬にクリーヴランド号で帰国。帰路の船旅は船酔いで惨々だった。卒業単位はほぼ取得済みだったが、楽しい学生時代にそのままさよならとは言えず、わざわざ留年した。通訳兼営業マンとして働いていたアルバイト先の画廊（ジャパン・アート・センター）に、卒業後もそのまま就職した。

二度目の訪米は、一九七一年の春に独立し、アートコンサルタント星野として活動し始めた時だった。フルカラーのカタログを世界中のコレクターにダイレクトメールで発送した後、僅かな伝手を手繰りながら、全米の美術館や顧客たちを訪ね歩いたのである。もつともカタログを手にして各地を訪問しても、経済的な成果は少なく、留守を守る家内（同志社大学英文学卒の才媛をだまぐらかして万博の年に結婚していた）の、通訳ガイドとしての稼ぎに全部おんぶにだっこの情けない有様だった。

ニューヨークへは、のちに雑誌『FOCUS』の表紙で有名になる三尾公三氏の、NY個展開催日に合わせての訪問だった。三尾氏は独立前に勤めていた画廊の取扱作家であり、多くのコレクターとの仲立ちを私が担当し、個展の下準備の段階から通信のお手伝いなどしていたのである。

この時、世界貿易センタービルが既に出来ていたのかどうか覚えていない。私の関心はもっぱらグッゲンハイム美術館やダウンタウンにある様々なギャラリーにあった。その後私の画廊活動が、明治以降の国内作家と作品の発掘に急速に移行するにつれ、こうしたアメリカの美術館や顧客たちとも疎遠になっていった。

ある時、滋賀県八日市市の小さな骨董品屋で、京都洋画の草

分け画家として重要な田村宗立の油彩画に出会った。発見に気を良くし、手当りしだいに明治・大正・昭和初期頃の絵画を買い集めた。やがて画廊の倉庫には、魅力はあるのだが知名度が足りなくて、売れ筋ではない絵がたくさん溜まっていった。

先輩画商たちから「作品には石と玉とがあつて、石ころはいつまで経っても石だ。こんながらくたを扱っているは駄目だ」と忠告された。私は却って反発した。「こんなに佳い絵が売れないのは世の中が間違っているんやから、自分の力で売れるようにしてやろう」と。

発掘した作品の傍証を得るために、京都や大阪の古書店で古い資料探しに没頭するようになった。幸運なことにまだその頃には珍しい資料や図録が、山積された雑多な古本の間に手付かずで眠っていた。

黒田重太郎著『京都洋画の黎明期』を読むように勧められたが、希少本で入手が難しかったので、関西美術院が所持していた本を借り出して、現物を入手するまで全ページをコピーして私の座右の書とした。蔵書は増え、やがて全国的美術館学芸員氏や研究者たちが、星野画廊所蔵の資料を見せてほしいと来訪するまでになった。

画人再発見の成果を問う「忘れられた画家シリーズ」の第一回展を一九七八年の二月に開催した。翌一九七九年は「明治の洋画家達」「関西美術院の画家たち」など五つの展覧会を開催。星野画廊独自の生き方が見えてきた頃だ。この頃には、「京都洋画の黎明期」に出てくる洋画家を全部網羅した画廊コレクションを目標すようになった。

一九九九年秋に京都文化博物館で開催された「京都洋画のあ

けぼの展」では、星野画廊の蒐集品や過去にあちこちの美術館にお世話した作品たちが集められ、展示作品のおよそ半分近くを占めるようになっていた。

『京都洋画の黎明期』を出発点として、京都洋画の歴史を辿る作業を進める途中、明治末期頃の京都に一石を投じた「黒猫会」「仮面会」という美術運動に注目し、画廊の蒐集品に少し幅が生じた。浅井忠門下生の黒田重太郎、津田青楓、新井謹也、田中善之助といった若手洋画家たちと、のちに大家となる小野竹喬、土田麦僊といった日本画家の名前に混じって、泰テルロという不思議なサウンドを持つ人物が共に活動していたことを知り、徐々に興味を持ち作品の蒐集を始めたのである。現在では異色の日本画家として世間で少しは通用するようになり、来年初には京都国立近代美術館と星野画廊の蒐集品を中心に、同館はじめ三方所の美術館で大々的な回顧展が企画されている泰テルロも、当時は誰も見向きもしない存在だった。

泰テルロを研究するうちに、関連した形で国画創作協会の作家たちの作品発掘にも精力を割くようになった。一九八四年一月に開催した「国画創作協会から新樹社へ」という展覧会が、その最初のお披露目である。一九六三年に京都市美術館で国画創作協会回顧展が開催され、田中日佐夫先生の「日本画撩乱の季節」が一九八三年に出版されても、世間は依然として、土田麦僊、小野竹喬、村上華岳といった国展の巨匠たちの作品しか注目していなかった。脇役や不遇な画家を発掘するという画廊経営を貫いたお蔭で、当時無名だった画家の国画創作協会展の出品作を九点も発掘することが出来た。

一九八六年、京都国立近代美術館新館開館記念展「京都の日

本画一九一〇〜一九三〇」に、画廊コレクションから貸し出した岡本神草の〈拳を打てる三人の舞妓の習作〉が、ポスターに採用され世間で評判となった。

一九九七年に京都国立近代美術館で回顧展が開催される頃から相場が急騰した甲斐庄楠音などは、「気持ちが悪くて」と日本画を商う画廊たちは見向きもしなかったので、蒐集は今より楽に出来た。

忘れられた画家の作品を掘り起こして蒐集していくのには、想像以上の時間がかかる。ある作家の作品に目をつけて蒐め始めるのだが、最初は蒐めていることを同業者に知られてはならない。といって誰も知らない作品が世の中に出てこない。露骨に蒐めると、堤灯をつける業者の数が増えすぎて、美術市場での購入価格が上がりすぎる。こうしたジレンマに耐えながら、長い、長い時間をかけてこつこつと、作品をひとつずつ蒐集していく。目標は、一作家百点というところ。これはあくまで目標値だから、全部が全部達成できることはないが、そうした中から遺作展に耐えるだけの秀作を選ぶのである。

今年の四月から産経新聞（大阪本社版）の毎週水曜夕刊の文化欄に、一年間の連載予定で「石を磨く」を執筆している。これまで美術史が主流として取り上げてきた作家たちの陰で、無数の優れた芸術家や作品が、まるで石ころのように捨て去られたままになっている。この連載では、三十年に及ぶ私の画廊活動の中で発掘した作品の一部を順次紹介し、数奇な運命を辿った作品との出会いを大切にしながら、不遇な芸術家たちに想いを馳せることにより、「石ころとされているものの中にも玉になる石がある」ことを明らかにするつもりである。